ホトトギス

七月号

ホトトギス
昭和二十四年二月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十六年七月一日発行（第百十七巻第七号）

俳句随想〔三百八十五〕

汀子

投句用紙の裏に、通信欄があり、一筆書いて下さるのを読むのは楽しみである。今は、ＮＨＫ出版から『俳句十二か月』の第二弾として出版した『花鳥諷詠、そして未来』を読んで下さった感想が多い。先ず判り易くて、字が大きく読み易いと喜んで頂いて嬉しい。

同時に私の講演集『俳句と生きる』も角川書店から出版された。それも、大勢の方々にお求め頂いて感想を書いて頂いている。内容をよく調べて原稿を書いていると感想を頂いて喜んでいる。これらを書いた時には、調べたり書き出したりして、原稿を書いた時の大変だったことが思い返され一冊に纏めたことは良かったと、お求め頂いた皆様方に感謝している。講演は本当に大変だった。原稿をしっかり書いて行っても、場所によっては、原稿が見えなかった時もあった。一冊に纏めて見るとそれも懐かしい。まだ、しばらくは講演をおたのまれすることもあるかもしれないが、もう私の限界かも知れない。実は、工業倶楽部で講話をお頼まれしていることをお引受してしまったことを忘れる所であった。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十五年七月一日　ロイヤル俳壇

山開待たるる心待つ心
好き嫌ひ問ふも百合の香なりしかな
一降りの雷までが待たれゐし
とかくして今年意味ある山開

七月六日　芦屋ホトトギス大会

ハンモックより起き上る一と工夫
雷鳴を誘ふ寸時を光りけり
山小屋の夏炉に寄れば皆仲間
山開済みし山容改る

七月七日　下萌句会

鞄より出してくしやくしや夏帽子
もしかして毛虫に生れ来しかとも
又忘れ置かれし彼の夏帽子
山荘に皆が帰りてくる夕焼

七月九日　大阪倶楽部

汗ぬぐふ間なく出掛けて来りけり
汗拭いて予定通りに行かぬこと
梅雨明けしことに加はる旅心
麦茶飲み干してより又考ふる
梅雨明けし今日も昨日も変らずに
ともかくも麦茶の冷えてをりしこと

七月九日　綿業倶楽部

涼しさといへる油断のありしこと
目の前の蝿虎に気づくまで
涼しさに気づき会話の弾みけり
結局は涼しき笑顔もて応ふ
よき返事とはならざるも涼しさよ

七月十一日　清交社

顔面の汗が語つてをりしこと
向日葵に元気貰ひし人のこと
空蝉となりし一斉てふことも
スケジュール通りにいかぬ汗となる
笑顔には汗が似合つてをりにけり
美しき汗の素顔で来られけり
その人の汗を信用してをりし

七月十二日　工業倶楽部

又一つ汗の稿債引き受けし
富士俯瞰暑き都心へ着陸す
朝曇発ち東京も同じほど

七月十五日　地球ボランティア協会

はやばやと夏負したる医師かな
梅雨明けしばかりの雨も大切に
月下美人咲きしはよべでありしこと
海の日に集ふ心を大切に

七月十六日　有恒俳句会

雲の峰ぐらり一と揺れ着陸す
席に着くすでに扇を持つてをり

七月十六日　無名会

受け応へはきはきとして涼しさよ
どうしてもかぶりこなせぬ夏帽子
外出の暑さに馴れて行くまでは
残し来し仕事涼しく忘れたく
似合はぬと知つてかぶりて夏帽子
旅立の涼しき笑顔揃ひたる
今日よりはとやかく言はず夏帽子

七月十七日　夏潮句会

若かりし頃の仲間として涼し
癒えられしことの涼しき明るさよ
退治せし毛虫が歩きをりにけり
夏痩の目許に力残りけり
ジャカランダ咲けば咲けばと又思ふ
上品に食べる西瓜とならざりし
新しき仲間の増えて会涼し

七月二十日　石見ホトトギス俳句大会前日句会

怪我癒えて三瓶の夏へとる旅路
神話あり国引の万緑の山
汗をさめくれし木蔭を又後に

七月二十一日　石見ホトトギス俳句大会

草原の命を渡る風涼し
時鳥聞きしと聞けば乗るリフト
三瓶野に偲ぶ誰彼明易き

七月二十五日　きさらぎ会

雷のための齟齬あり遅れ着く
もう登山出来ぬ足弱とはなりぬ
見し歌舞伎四谷怪談汗涼し
一稿を書き終へしこと涼しさよ
雷の近づく如く遠ざかる

七月二十六日　時雨会

夏痩にひそむ病もありぬべし
山荘の夕焼語りつがれけり
きつかけは夏痩と聞くばかりかな
あるだけの団扇を出して客設
夕焼の家路に旅の名残あり

七月二十七日　野分会夏行

若者に逡巡はなし露涼し
若者に涼しく学ぶ大広間
皆若き日々大切に集ふ夏

七月二十八日　野分会夏行

百合の香の届かぬ広さあるロビー
炎暑とて出掛ける若さ羨しとも
古都の夜の旅寝涼しくありしこと
汗の顔次々戻り来し若さ

PDF= 俳誌のsalon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年七月二、三日　徳源寺句会木曽福島吟行会

手に取りて木曽の檜の椀涼し
汗引いて奈良井宿へと一歩かな

七月四日　蕉心会

靴音の重くなりたる半夏生
梅雨雲のスカイツリーを振り上げ
下町の音を吸ひ上げ梅雨曇
梅雨雲の降りてくるビル伸びてゆく
クーラーに微妙な好みありにけり
濡れ色といふ万緑の館の庭
五月雨を呑み込み育ちゆく流れ
黒南風に疲れ切つたる館の木々
館の蚊はみちのく美人好みかな
時計草その他従へ四葩供華

七月五日　カトリック新聞選者吟

ひつそりとマリア地蔵や薫風裡

七月六、七日　あうたう句会

梅雨滂沱さうよ私が悪いのよ
梅雨傘を駅に買ひたることも旅
奈落より夏霧上り来る早さ
万緑に押し潰されさうな社
蛍は又来年の楽しみに
夕焼に句座華やいでゆきにけり

七月八日　朝日カルチャー若草句会

夕立を誘ひ出したる摩天楼
沙羅の花三瓶の夜を深くして
沙羅の花落ちて華やぐ大地かな
夕立の一粒よりの修羅場かな
夕立を避けて二人の世界かな

七月九日　むさし野吟行会

武蔵野の俤今に露涼し
青蔦に埋もれて虚子の句碑の黙
参道の長さに汗をさめけり

七月十一日　土筆会

ソーダ水昔の恋は怖かつた
ソーダ水会話弾みし女子高生
一杯で恋は語れずソーダ水
日盛の東京アスファルト地獄

七月十八日　登高会

雷の鳴ればビル風新しく
六甲といふ雷神山に句碑一基
心太蜜派しやうゆ派敬遠派

七月十九日　浜田吟行会

夕立を抜け山陰の趣に
初蝉の烈女を偲ぶ音色かな
山陰に来て初蝉といふ出会ひ
みんみんのリズム崩れてより翳り
橋涼し宇宙と対話する如く
スコールに車窓塗り替へられてをり
その中のみんみんといふ鎮魂歌

七月二十、二十一日　石見ホトトギス俳句大会

佐賀ナンバー神戸ナンバー集ふ夏
句碑を守る夕菅星の使者として
夏蝶の風の節目に折れ曲る
飛ぶものに跳ぶものに大夏野かな
合歓咲いて終つて句碑の歴史又
夜遊びの序曲を奏でたる黄菅
北斗の柄三瓶に夜涼放ちけり

七月二十三日　若水句会

研ぎたての包丁すぱとトマト割る
影富士や世界遺産といふ孤独
ティッシュ配り団扇配りへ替りゆく
丸かじりてふ醍醐味のトマトかな
噴火する噂ちらほら富士詣

七月二十四日　目黒学園句会

霍乱の祖父に生気の戻る粥
霍乱や水は買はねば飲めぬ国
母の味妻の味胡瓜もみかな
ビル失せて片陰失せてしまひたる

七月二十六～二十八日　野分会夏行

鹿せんべい涼しく狙ふ瞳かな
木の神秘涼しく説いてをられけり
飛火野の草いきれとは古代めく
かき氷一つで君は靡かない
登山めく飛火野といふ斜面かな
子規を知る青柿として艶やかに
古の時間流るる古都晩夏
蟬涼し平城京の風に触れ
古都の風甘く仕上げて百日紅
旧友に会へざることも涼しさと
大仏の憂ひ顔なる夜の秋
三日間佳人に案内され涼し

PDF= 俳誌のsalon

雑詠

廣太郎 選

絵踏の世遠くバチカン訪れし　神戸　千原叡子
絵踏なき世や教皇に拝謁し　同
糺されて踏絵心地となりしこと　同

寒夕焼神の切絵の富士を置く　相模原　木村享史
喧嘩にも独楽にも勝てず本を読む　同
銀座の灯恋うて来してふ雪女　同

寒晴の全容の富士凰とも　長岡　安原葉
冴返る関東白く塗り潰し　同
本堂は隅の隅まで余寒かな　同

作務すみしばかりの廊や雪明り　東京　田丸千種
障子閉て一切の私語禁じられ　同
紅ほのと白ほのぼのと梅の花　同

左義長の通りすがりのかつぽ酒　熊本　岩岡中正
しあはせは本を読むこと春を待つ　同
踏青の足裏よりこゑあるごとし　同

青と碧水仙の香に隔てられ　東京　河野美奇
春一番山鳴いまだ消えざりし　同
春一番過ぎたる星座移りをり　同

種芋の納屋の暗さに冷えてをり　香川　湯川雅
湯気立や茶店の隅に占ひ師　同
積む不安積らぬ不満春の雪　同

紅梅は満開駐車場満車　東京　大久保白村
箱根越え花粉を運ぶ涅槃西風　同
朝寝して花粉に弱き者どうし　同

同じ月見る約束の二人かな　同　今井肖子
秋日傘たたみ日陰の色となる　同
風に乗る電車の音や秋の晴　同

土俵てふ神宿る土暖かし　奈良　古賀しぐれ
幕下が部屋最高位山笑ふ　同
亀鳴くやまだ髭結へぬ前相撲　同

潔さ勝るものなし冬木立　吹田　大橋晄
あつぱれな散りざま寒の御堂筋　同
寒鴉己励ます鳴きつぷり　同

春一番小学生は駈けたがる　龍ケ崎　今橋眞理子
霞より富士現るるとも消ゆるとも　同
梅咲いて良き枝ぶりの生まれけり　同

さざ波を映す老舗の春障子　東京　橋本くに彦
青空の色不確かや浅き春　同
日の縁に宵の戦略うかれ猫　同

藍染の色洗ひ上ぐ寒の水　神戸　山田佳乃
くちびるのすぐに乾いて大試験　同
東京の残雪誰も振りむかず　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（六月号より）

くに彦・しげ人・仁　義
雅　・佳　乃・さい雪
純　也・比奈夫・公　次
一　歩・廣太郎

かまくらにありたる隣近所かな　神戸　**後藤立夫**

秋田県横手市の「かまくら祭」に筆者も幾度か行ったことがある。町中に大小のかまくらが作られ、また河川敷には数百の小さなかまくらが並ぶ。日が沈むころ、そのひとつひとつに灯が入り大きなかまくらの中では、餅を焼き甘酒や漬物を振舞ってくれる。それらは正に隣近所の子供達のもてなしである。外の気温は零下であるが、そのほのぼのとした雰囲気が良く伝わってくる。（くに彦）

筆者も一度秋田県横手市の「かまくら」を正に二月十五日に訪れた事がある。大小様々でバラエティーに富んでおり、人の入れる大きさのかまくらが並んでいる様子は、確かに一つの社会を形成しているようにも感じられる。何とも人の温みを感じさせてくれる句である。（廣太郎）

明けて来し山河や鶴の羽の下　相模原　**木村享史**

空といふ自由鶴舞ひやまざるは　汀　子

平成二十五年十二月十四日、鹿児島の俳人の念願だった汀子先生の句碑除幕式が鶴哫の中に行われた。掲句の作者も参列者のお一人であった。

出水野の鶴は、夜明け前に塒を離れいくつもの群をなして八方へと翔ってゆく。そして、餌が撒かれ、四方の山が茜色を帯びる頃、湧き上がるように舞い戻ってくるのである。

掲句は美しい日本画を見る思いがする。「羽の下」と詠んだことで鶴と山河に自然と距離感が生じ、作者の位置も確かなものとしている。明けゆく山河の美しさ、朝鶴の舞の荘厳な世界を省略を活かして描いた一句である。（しげ人）

鶴の飛来する有名な場所を想像するが、日本であれば鹿児島の出水辺りであろうか。朝、鶴が目覚めて飛び立ち始めて、だんだん活気ある鶴の声も聞こえてくる時間であろう。その内より多くの鶴が大空を目指して飛び立つダイナミックな姿がこの句から見て取れる。鶴の大きさが見事に表現されている。（廣太郎）（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

沢子選

父恋ふ子子を恋ふ父や花に黙　神戸　後藤比奈夫
父の愚痴花に酔ひしといふにあらず　同
村中が運動会といふ過疎地　東京　稲畑廣太郎
ばつた跳ぶ流線形の顔歪め　同
故郷にあらねど島の冬あたたか　熊本　岩岡中正
出港のフェリー春日を満載す　同
自らが恵方と決めし道を行く　相模原　木村享史
志あれば八十路を悴まず　同
余寒とて命育む雨とこそ　東京　河野美奇
濡れるなと言はれてゐたに春の風邪　同
初音ふと小さき幸でありにけり　龍ケ崎　今橋眞理子
したきことすべきことあり二月尽　同
霜柱金剛力の立ち上る　福山　竹下陶子
父よりの備前の一刀小正月　同
早春の瀬の音に暮れこけし村　仙台　赤川誓城
どこへ行く当てもなけれど春寒し　同
飛鳥野の巨墓の辺の菫草　橿原　稲岡長
強風に耐へ咲き満ちし今朝の花　同

父の忌の海穏やかに十三夜　東京　大久保白村
荊妻の小言身にしむことばかり　同
さりげなくはげます書信梅二月　同　山田閏子
誰も気にかけてはくれず春の風邪　同
紅梅に情白梅に寺格あり　奈良　古賀しぐれ
淡雪の散華ありけり二月堂　同
鶯や吉野訛もなつかしき　長岡　安原葉
老丈夫若きらはみな春の風邪　同
春時雨止み万象の光かな　宝塚　水田むつみ
桃の日やちよつと見ぬ間に美しく　同
かまくらの灯りて星の夜となる　神戸　後藤立夫
春が好き音で読んでも訓読みでも　同
春時雨今見送りし人恋し　同　長山あや
紅梅の紅に雨滴といふ光　同
早も来し花の集ひの誘ひはも　東京　今井千鶴子
遥かなる吉野の桜さくらかな　同
熱の子にはうれん草の魔法効く　神戸　三村純也
陽炎を縫うて湾岸通路かな　同

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

余寒とて命育む雨とこそ　東京　河野美奇

自分がよしと信じる道。

初音ふと小さき幸でありにけり　龍ケ崎　今橋眞理子

自然の恵みを受け取る心。

霜柱金剛力の立ち上る　福山　竹下陶子

謙譲な心。

どこへ行く当てもなけれど春寒し　仙台　赤川誓城

霜柱のかくされた力。

春寒の家居に思うこと。

（以下略）

父恋ふ子子を恋ふ父や花に黙　神戸　後藤比奈夫

父の愛、子の愛、に生きる。

村中が運動会といふ過疎地　東京　稲畑廣太郎

過疎地全体で一家族。

出港のフェリー春日を満載す　熊本　岩岡中正

快適なクルーズ。

自らが恵方と決めし道を行く　相模原　木村享史

PDF= 俳誌の salon